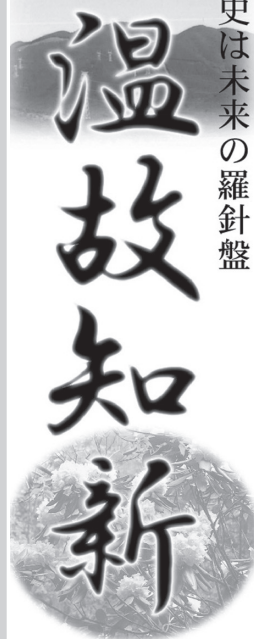


歴史は未来の羅針盤



これまでに刊行しました『近江日野の歴史』は、第一巻「自然・古代編」、第二巻「中世編」、第三巻「近世編」、第五巻「文化財編」、第六巻「民俗編」、第七巻「日野商人編」、第八巻「史料編」となりました。教育委員会や各公民館などにおいて、一冊四、〇〇〇円で好評販売中ですので、ぜひともお買い求めください。

『近江日野の歴史』第三巻「近世編」を発売して以来、江戸時代のさまざまな日野の姿を紹介しています。今回は、その中から江戸時代の日野の町について紹介します。

近世の日野町

江戸時代の日野の町は、戦国時代に蒲生氏の城下町として形成された町場を引き継いだものです。蒲生氏の時代の町は、城下町としてひとまとまりで、蒲生氏のみを領主としていました。しかし江戸時代の日野の町は日野村井町・日野大窪町・日野松尾町の三つの町に分かれ、それぞれが支配の単位となり、領主も異なっていました。この町は現在の大字に引き継がれています。また、日野松尾町では、領主が二人に分かれたため、上組と下組に分かれています。

三町の名称は「町」でしたが、行政的には村と位置づけられました。蒲生氏の時代に与えられ

た土地にかかる税の免除の特権が廃止されて、村と同様に庄屋が置かれ、年貢もかかるようになりました。しかし、蒲生氏の時代の名残として一部の役が免除されるなどの特権が認められました。この点は、日野三町と周辺農村との大きな違いです。

町の景観

日野の町場の中心には、東西及び南北方向に延びる通りによって格子状の街区が形成されています。通りを挟んで両側に建ち並ぶ家屋敷によって構成される町を両側町と呼び、町民たちの最も身近な生活共同体となりました。例えば本町通り沿いにある、大窪の上大窪町などが両側町です。この両側町も現在に引き継がれています。

このような町割がつけられたのは、蒲生氏が日野を治めた一六世紀後半以降であると考えられています。

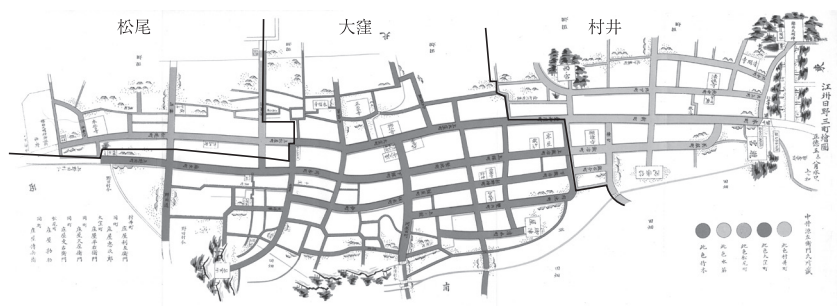
ます。正徳五（一七一五）年に描かれた「江州日野三町絵図」には、当時の町の名と区画が示されていますので、そのころには現在のようない町並みができていたことがわかります。

町に暮らす人びと

では、日野の町はどのくらいの人びとが暮らしていたのでしょうか。現在のようない統計データはありませんが、三町それぞれについて確認してみましよう。まず、日野大窪町では正徳二（一七二二）年には家数八五七軒、人数四一〇〇人あまりであったことがわかっています。それに対して、同じ頃の日野村井町では家数が二六一軒ほどでした。また、宝永八（一七一七）年の松尾町下組の家数は三四軒、人数一六〇人、文政十三（一八三〇）年の松尾町上組・下組を合わせた家数一四四軒、人数五一八人でした。時代の違い

はありますが、三町を合わせると一二〇〇軒を超える家があったことがわかります。

天明八（一七八八）年、日野を訪れた、絵師・蘭学者である司馬江漢は、「人家千軒余と云う」と『江漢西遊日記』に記しています。千軒余という表現は決して大きな表現ではなく、日野の町には多くの家が立ち並んでいたのです。



▲「江州日野三町絵図」